

# 助成年度：平成5年度

[所属] 兵庫県立社高等学校  
[役職] 教諭  
[氏名] 代表者 田先 崇志

[課題]

## 環境教育（小学校・高等学校）に関する日本と韓国の比較研究

[内容]

はじめに

環境教育と環境問題について、考えてみますと「環境教育」という言葉は、1970年にアメリカで「環境教育法」が制定された。そのころから「環境教育」という言葉で、そのあり方が、世界の教育界で議論されるようになり、1975年にベオグラードで開催された、国際環境教育会議で環境教育のねらいを明確にした、「ベオグラード憲章」が採択された。

我が国でも各地で、「環境保全教育」・「公害教育」という用語で取り組まれていた。

1991年に、文部省は『環境教育指導資料』を発行し、これによって環境教育の教育実践が具体的に検討されるようになった。

日本の小学校と大韓民国の小学校で、『新しい環境・世界の学習のための調査』を実施した。さらに、兵庫県高等学校と大韓民国の高等学校で、両国の『高校生の環境に関する意識』の国際比較を実施した。上記の比較研究により、東南アジア諸国の環境教育の一例が例示されるだけでなく、今後の東南アジアの環境教育の参考になるのだけではなく、環境教育を実施する場合は“地球は一つ”という見地で考える必要性が生じ、国際環境問題を考える資料になればと考え研究しました。この研究が、国際社会への貢献ともなれば幸いである。

### 1. 研究のねらい

科学技術の進歩は、人間に大きな恵みと繁栄をもたらしてきた。しかし、その反面、科学技術に支えられた人間社会の様々な活動が、オゾン層の破壊、酸性雨、地球の温暖化等、地球規模の環境問題をひきおこしてきている。そこで今日、学校教育において、環境問題を取り上げて、環境教育を推進していくことは重要な課題といえる。学校教育においては、身近なところから環境についての関心を高め、環境に対する豊かな感受性や知見を備えた人づくりを進めたい。

日本と大韓民国の小学校の児童、高等学校の生徒の「環境に関する意識」の比較をして、今後の国際環境問題を考える資料にする。

### 2. 研究の内容

調査校数 日本 3 小学校（大阪市立大開小学校・兵庫教育大学附属小学校・丸亀市立城坤小学校）  
大韓民国 4 小学校（ソウル教育大学附属小学校・ソウル市公立小学校・テグ教育大学附属小学校・テグ市公立小学校）

兵庫県 6 高等学校（兵庫県立須磨友が丘高等学校・三原高等学校・篠山鳳鳴高等学校・社高等学校・香寺高等学校・生野高等学校）

大韓民国 6 高等学校（水原女子高等学校・亀尾女子商業高等学校・友保高等学校・金海女子高等学校・慶南体育高等学校・馬山女子高等学校）

地図 1 日本国と大韓民国 図 1

※ 日本と大韓民国の小学校の比較調査は、大きな変化がないのでこの研究報告書では、紙面の関係で省略いたします。

## 地図 2 兵庫県の調査した高等学校の位置

調査対象	兵庫県の高校生（一年生 187名、二年生 307名）計 494名
	大韓民国の高校生（一年生 43名、二年生 443名）計 486名である。
調査の内容	資料1を、兵庫県の高校生に実施する。
	資料2を、大韓民国の高校生に実施する。

### 調査実施校を選定した理由

1. 兵庫県は、行政区別の6地区に1校を選定した。
2. 大韓民国は、各区地区を6分類して、各種各科・男女を勘案して均等になるようにした。

### 3. 今後の課題と問題点

(1) 今回の研究グループが実施した、「環境問題に関する意識調査」の質問内容は、大韓民国の小学校（国民学校）の教師、高等学校の社会・理科・保健体育の教師に読んでもらい、日本語からハングルに翻訳した。その後、さらに大韓民国の高等学校の日本語の教師に目を通してもらった上で、最終的にテグ教育大学教育学部の教授に点検を頂き、大韓民国の高等学校の生徒に実施した。協力をお願いした大韓民国の高等学校の教師・テグ教育大学の教授は、全員日本の大学への留学の経験もあり、日本語も堪能である。日本の教諭も全員がハングルを読むべきだった。

(2) 今回の実施した日本と大韓民国との「高校生の環境教育に関する意識の国際比較研究」は、調査した区域が日本の一部地域である兵庫県と大韓民国全体との比較であったため、無理があったようだ。

(3) 両国の高校生の理系・文系科目の選択による、生徒の学習にも大きな違いがでてきている。例えば、日本の教育課程では、理科の科目数・単位数は少なくなっているが、大韓民国の教育課程は、前々回に日本が実施していた時の教育課程の様に、理科（大韓民国では科学）は、物理・化学・生物・地学の全ての科目を履修している。こんな面からも学習に関する内容も違ってきているようである。

(4) 課程の結果から、環境教育の学習は、小学校では、兵庫県も大韓民国も同じ程の割合で学習している。中学校になれば、兵庫県では地域により、学習の状況が違っている。例えば、環境の現状の違いにより、学習比率の高低が出ている。大韓民国では、進学校へ進学している高校生ほど、中学校の時に環境教育の学習をしていない。高等学校においては、兵庫県の高等学校は学習に大きなばらつきがあるが、大韓民国では各校ともに高い学習率を示している。この点は、今後の環境教育を推進する上で、参考にしなければならない。

(5) 調査の結果から、兵庫県の高校生はよくマスコミ等の報道されている、環境問題に関する関心度が低く、無関心派の生徒が多い。この無関心派の生徒を、どのように導くかが大切である。

(6) 調査の物質では、フロンガスについては、両国の高校生ともに、よく知っている様である。しかし、 $NO_x$ 、 $SO_x$ の知識は、兵庫県の高校生は、日本の自動車産業界の世界一を誇る排出ガス規制技術の向上からか、知っている生徒が大韓民国の三分の一である。しかし、大韓民国の高校生の $NO_x$ 、 $SO_x$ の知識の理解度の高さには、考えさせられるものがある。オゾン層の破壊による影響についても、兵庫県の高校生は、大韓民国の高校生に比べて、「あまり知らない」と解答した生徒が五倍もいる。これらの点も環境教育の指導で参考にする必要がある。

(7) 設問の14で「環境悪化を防ぐために、何かの努力をしようと思いませんか」の回答では、環境の悪化を防ぐ、何らかの努力をする心が、兵庫県の高校生には、低い傾向がある。我々の今までの教育の方針・指導の方法を再考しながら、これからの教育に臨まなければならない、この点は、今後の課題であろう。

(8) 日本の地形と大韓民国の地形を比較すると、日本は環境的に恵まれている。この地形の大きな相違点から、大韓民国の環境教育の必要性と実施度が、この調査の結果が数値として出ていると思われる。

(9) 最後の設問は、大きな問題が提起されているが、ここでは省略したい。